春の花木

原　秀雄

鶴岡公園の桜

春の花木と少し漫然としたことを書いてみても、やかましくいうと何のことかわからないといわれそうである。先ず化石時代の植物あるいは木生羊歯類などは別として、普通われわれの周りにある木は何れも目につき易い易くないの差こそあれ、花の咲くものであり、何も花木などとは屋上屋の感があるといえばそれまで。またどこからどこまでが春でいつが夏との境かということにでもなると、更に事がむずかしくなろう。そこで先ず花木とは花の特に目立つ樹木であり、従つて春頃花の咲くものを春の花木というとしておこう。ところが木の花は概ね春に咲くといつてもよい程春花を開く木は極めて多く、園芸上春の花木と称えるものも従つて多いことは驚くべきものがあり、正に春は爛漫と百木花を発くの季節ではある。

旭に匂う山桜はもとより、天産、移植いろいろの花木の名を挙げるだけでも中々容易でないが、早春にはマンサク、ヒュウガミズキ、トサミズキ、サンシュユ、レンギョウ、ナニワズなど黄色の花を開くものが多く、春も少しすすむとコブシ、キタコブシの白、桜のいわゆる桜色、エゾムラサキツツジの紫、ムラサキヤシオツツジの薄紅、ズミ、ハナカイドウなどの紅、白、山吹の黄、ヤマツツジの紅などと時の歩みと共に山に野に庭に木の花の色も様々に賑うことであるが、ここではその中の二、三をあげて筆の赴くがままに書きしるすこととしよう。

マンサク　フクジュソウを東北地方や北海道でマンサクというが、ここにいうマンサクは落葉の灌木または小喬木（高さ五米位）となるマンサク科の植物のことで、マンサクの名の由来は木のも草のも共に同じであるように思われる。古い文献によるとマンサクは先開の意で、早春諸花に魁けて花を開くのによるという。しかし一説にはこの木の花が小さいながら多数に簇がつて咲くのを満作といつたものであるという。また物品識名拾遺、草木名寄にアヲモミ、ウメズエの名が見えるが、結局この二名はマンサクの品種の名あるいは一名のようである。この木の花東京あたりでは二月頃に開くが札幌では三月末から四月で、細くて皺のある四枚の花弁は黄、萼は四で楕円紫紅、一つの花は小さいが、一叢一―三花づつついて、葉のない枝に簇生して咲くのでよく目立つ。一種佗のある花容枝態を具える花木である。北海道南部から九州までの各地に自生する。花の後に稍菱形で濃緑の葉を生じ、実は秋に熟する。マンサクの名は文化二年（一八〇五）の四季賞花集に初めて見るが、アヲモミの名は享保十二年（一七三二）の聚芳帯図左編に見え『園亭の奇種也』としてあるから、稀にしか用いられなかつたものらしい。しかし文政（一八一八年以後）頃にはすでに生花殊に茶席の挿花として用いられたようであり、文政十二年（一八二九）の草木錦葉集にはすでに斑入葉品種の記載がある。樹木和名考にはカタソゲ、ムサテの方言名を記す。

この木は夏乾きすぎぬような場所であれば余り土質を選ばない。若いものは雪に折られないような注意も必要である。実生及根接で育苗するが稚い苗の生長は余り速かでない。現在園芸品種として黄金マンサクあるいは純黄マンサクなどというものがある。また北米原産のマンサクに秋咲マンサクといわれているものがある。この花はわがマンサクと異なり花は秋に開く。

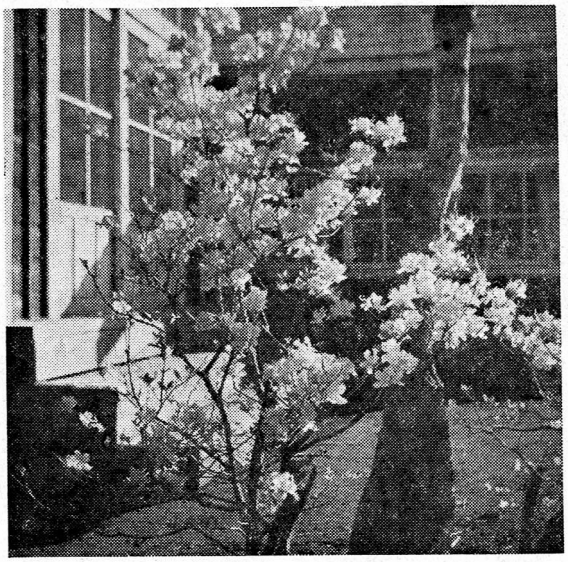
葉に魁け梢を埋めつくして真白に咲いたキタコブシの花
（札幌円山公園）

コブシ　落葉喬木で寛平四年（八九二）の新撰字鏡に辛夷、山蘭、山阿良々木、また比岐佐久良、志太奈加、九二〇年頃の本草和名に也末阿良良岐、延長五年（九二七）の和名抄に夜末阿良々木、古不之波之加美、更に九八〇年より前に出た和名本草にも和名抄と同じ和名を挙げた上、更に己不之（コブシ）の名を記し、文安元年（一四四四）の下学集に

コブシの名があるところから見ると、古くはこの木をヤマアララギ、ヒキサクラ、コブシハジカミなどとよび、中頃コブシと呼び今日に至つたものといえよう。ヤマアララギは山アララギであるが、今イチヰ即ちオンコをアララギというこのアララギでないことは明かであるが、このアララギの意は明かでない。コブシハジカミのコブシは拳、ハジカミは山椒即ちサンショウであり、一説にはショウガである。箋註倭名類聚抄に蕾を人拳に見立て、その味が辛いのによる名としてあるが、拳に似ているのはむしろ蕾より実の方と思われる。また辛夷は確実にはコブシではなく、どうも今のシモクレンではないかとも考えられている。もとよりコブシは日本の産で中国大陸にはなく、漢名のないのは当然である。

この木の名を西暦九〇〇年よりも前のわが国の古い文献に見ることは、この木が古くから人々に親しまれて来たことを示すものである。花を愛でたことはもとよりであるが、その他延喜式の献上品中にこの種子、木皮あるいは花と思われる記述があるところから見ると、様々の用途もあつたかと考えられる。夫木和歌抄に、『うちたえて手をにぎりたるこぶしの木　心せばさをなげく比哉』(民卿為家)の一首がある。花譜にも花壇地部錦抄にも大和本草にもコブシの記載があり、降つて正徳二年(一一七一)の和漢三才図会には明かにこの木が花木として植栽されたことを記してある。この花を折りとつて人に贈る歌として古く『時しあればこぶしの花もひらけけり　君かにきれる手のかかれかし』(続詞花集)の一首があるが、弘化四年(一八四七)の剪花翁伝には生花としての使用法を記してある。

この木も北海道から九州に至る各地に自生を見るが、北海道と東北地方とにはキタコブシとよぶこの木の一変種が見られる。これは、コブシより葉も花も稍大ぶりである。花は共に白く、葉の未だ開かない梢に一杯開く様は、山にあつても庭にあつても中々に鄙びた趣があり、花は白、木蘭などより野生的ではあるが、それ等には求め得ない野趣がある。近くに見てよく遠く眺めて更によい。



庭の一隅に咲いた山つつじ

苗は実生で育てる。実が熟せば割れて赤い種子が出るから、これを採つて砂の中に貯え、春に至つて床蒔にする。やがて発芽したものはそのまま冬を越させ、翌春床に六、七寸の株間に植かえる。その後は木が伸び枝が茂るに従つて植かえを行う。ただこの木の育苗は少し年月を要し、且つ相当に年を経ないと花が咲かないことはホホノキなどと似ている。この木らしい植え方は他の木との混植がよく、単植するよりずつと自然で美しく趣がある。少し広い庭や公園などには必ず植付けたい木であり、喬大な木でこの木程春先早くから人目をひく花を咲くものは、桜などをおいては他にないのみか、桜に先じて春を告げる木である。この木の花が沢山咲いた年は豊作になるというが、木の花が春沢山咲く咲かぬは、前の年の天候がこれを左右することが多いと思われるが、この花の多い少いと農作の豊凶との関係は、世間のいいならわしのように簡単に言い切れないものがあろう。

サンシュユ　これも春花の早い落葉喬木であるが、この木は朝鮮及び中国大陸原産の高さ六―七米に及ぶ耐寒性の強いミツキ科の植物である。ミヅキ、ハナイカダ、アヲキ、ヤマボウシなどといろいろの庭木としても面白い樹木があり、その中にあつてサンシュユは花が最も早く、これ亦葉の出ない先に札幌では五月の初め頃、対生する短枝の先端に繖形に小さな四弁黄色の小さな花を簇り開く。花の後に葉を対生する枝を伸し、真直に伸びた長枝には翌年短枝を生じ、これに花芽ができる。これが一斉に開くので、春花の時には甚だ美観である。サンシュユという名は漢名山茱萸によるのであるが、この漢名を有する植物は今日われわれのいうサンシュユとは異なるものである。山茱萸の名は甚だ古くよりわが文献に見られ、延喜式、本草和名に見るが、はたして今のサンシュユを指すか否か不明である。牧野博士はこれにハルコガネバナ(春黄金花)の名を与えたが異名として古名録にサハグミ、カリハの二つが記されている。サハグミのグミは、秋に赤く熟れる実をグミの実に見立てたものであろう。またこのサンシュユにはアキサンゴ(秋珊瑚)の名がある。これはやはり実の見立てである。この花木は庭に植付けてよく、枝を切つて切花によい。

育苗は挿木(春)によるが、また根接を行う。挿木は発根容易であり、ヘテロアムキシンなどの生長素処理を行えば一層発根良好である。木の若い中は速かに伸びぬが、年月を経るとよく伸びるようになる。広い庭園ではこの木の植込など是非ほしいものの一つである。また春早く花芽をつけた枝を温室に入れて促進開花させることができ、弘化四年(一八三七)の剪花翁伝にもすでにこのことについての記載がある。また更に早く十二月頃に花を咲かせる場合には十一月頃切採つた枝を十時間程摂氏三十度前後の湯に入れて温浴催芽を行い、これを水に挿して温室に置き、時々切口を切りかえして水カビの生ぜぬようにし、且つ枝に霧を吹いて花芽の生長を促すとよく開花をはじめる。―一九五六・一月―

(北海道大学植物園主任・北大助教授)